

中国語中国関係学科における北京夏期研修と通常授業との連携に向けた取り組み

和田 知久・于 小薇・宗 婷婷・伊藤 正晃

1 はじめに（和田知久）

中国語中国関係学科の中国語の授業を担当する教員は、一つの組織として、また個々の教員の関心と責任の下に、日々、中国語教育に対するさまざまな取り組みを行っている。

その中の一つが、協定校である外交学院（北京市）との交流である。本学科は学科設立以来外交学院にて、毎年夏休みを利用した1年生全員の参加が必須の短期研修を行っており、本年は3度目の実施であった。それ以外にも、本学と外交学院の中国語の授業を担当する教員どうしの教学経験の相互交流にも力を入れている。北京夏期研修の実施に先立ち、クラス分けや授業内容、課外活動に至るまでを協議し研修プログラムを構築することはもちろん、研修期間中も主に学生の引率を担当する本学教員が、現地教員と綿密に連携することでより効果的なプログラム運営が図れるよう努めている。また、2010年12月には外交学院對外漢語教研室主任である姜倩氏を本学に招聘し、中国語教育についての研究討論会を開催することができた。

本学科が外交学院と交流する目的は、単に北京夏期研修の実施を円滑にするためだけではない。北京夏期研修と本学での通常授業との連携のあり方を探り、そこで得られた成果や問題点を本学科の中国語教育システム全体へ速やかに、確実にフィードバックすることで、その一層の充実を図ることにある。

以下に、中国語の授業を担当する本学科の専任教員によるそれぞれの取り組みを紹介したい。

于小薇は、昨年、外交学院對外漢語教研室の教員を本学に招き開催した中国語教育についての研究討論会の際に行われた、姜倩氏による北京夏期研修に関する発表の主旨を紹介する。次に、伊藤正晃は、北京夏期研修に参加することで学生の発音がいかに変化したかについて、実験音声学的な見地から分析する。和田知久は、北京夏期研修の際、上級クラス「読解課」で使用された教材について分析し、さらに本学通常授業との連携の可能性について考察を加えている。宗婷婷は、自らが担当する1年生対象の中国語の通常授業における取り組みについて紹介する。

2 外交学院と中国語中国関係学科との北京夏期研修に関する分析—検討会の内容を素材に—（于 小薇）

2010年12月10日、北京外交学院對外漢語教研室の姜倩先生が来学される際、中国語中国関係学科の中国語教育担当者主催の研究会に参加され、外交学院における本学科学生の北京夏期研修について報告された。以下に、その報告の主旨を紹介する。

2.1 中国語中国関係学科北京夏期研修の現状

2.1.1 科目設定

2009年から本学科の設立とともに、一年生全員が夏休み期間中、北京外交学院にて一カ月の中国語語学研修に参加することが義務付けられている。研修中の授業時間割は表のとおりである。

	2009 年	2010 年
参加者数	21	21
実施期間	8/6～9/2	8/5～9/1
授業週間	3	3
週間授業時間	20	20
科目	読解/会話/リスニング	同左
科目ごとの週間時間数	8/8/4	8/8/4
科目ごとの週間コマ数	4/4/2	4/4/2
クラス数	2	2
語学レベル	初級 I / II	初級 I

表のとおり、二期のクラスの授業時間と科目設定は同じである。授業実施週間は3週間であり、総授業時間は60時間である。授業科目は読解と会話、リスニングの3科目である。読み書きは中国語総合教育科目で、会話とリスニングはスキルを高める専門科目である。

クラス分けについては、2010年は前年度の2009年と違い、同じレベルの2クラスに分けられた。各クラスは人数が10人前後で、語学教育に最適な条件が整っているといえる。

2.1.2 授業内容

夏期研修は、3週間という短い授業期間内で学生のコミュニケーション能力の向上を目指し強化訓練を行うことが目的なので、文法の説明より会話と聞き取り練習を目標とする。日本語を使わない授業を通して、学生の聞き取れない、会話できないというコミュニケーション能力の欠如を最大限に補完することを到達点とする。使用教科書は以下のとおりである。

読解：『漢語教程 第一冊修訂本（上）』、北京語言大学出版社

会話：『漢語口語速成 入門篇（上）』、北京語言大学出版社

リスニング：『漢語聴力教程 初級（上）』、北京語言大学出版社

以上の3冊はすべて日本語の注釈付きの教科書である。学生は3週間の学習を通して、日常に不可欠な会話のシチュエーションをほぼ網羅している。具体的に、言語表現について、「あいさつ、感謝、別れ、説明、問い合わせ、肯定と否定、要求、お詫び、気持ち」などの表現が挙げられている。会話のシチュエーションについては、「キャンパスライフ、会食、買い物、書店にて、銀行にて、友人との約束」などの場面が挙げられている。

2.1.3 教育方針

北京夏期研修の最大の目的は、ことばの応用能力をいかに能率的に高めるかどうかにある。研修に使用された教科書は本学で使用したものとは比べ、難易度に差がなく、しかも文法説明などの項目に日本語の注釈があるため、授業の重点を学生の「話す、聴く」能力の向上に置き、限られた授業時間を最大限にオーラルトレーニングに回すことになった。よって、文法の説明をほぼせずに授業を進めた。

以上の教育方針に基づいて、夏期研修の授業の取り組みは次の3点にまとめられる。

第1に、授業の主役を学生に演じてもらうこと。コミュニケーション能力を高めるには、ことばの反復トレーニングが不可欠である。教員側が基本表現を講じ

てから、学生一人一人に積極的に会話するように促す。

第2に、実用性を重視すること。教員が説明するときには使う例文は、学生がすぐに活用できる、あるいは毎日のように使うことばを選び、初級の段階でも中国語でコミュニケーションできる喜びを学生に味わってもらうように心掛ける。

第3に、独自の教育方法を導入すること。短期間かつ初級レベルの中国語教育に関しては、教員側と学生側の役割分担を明確にし、双方のフィードバックが必要である。具体的には、学生は授業に出る前に教科書の新出単語と日本語注釈付きの文法説明を予習し、教員は授業をするときに文法のポイントのみ提示し、それに基づいて、本文の会話文を軸に学生一人一人とモダリティを変えて会話の練習をした後、学生同士での会話を発表させる。

授業進行は以下のとおりである。

- ① 先ず、間違いやすい発音や文の正確なポーズを指摘しながら、教員の後について本文を朗読させる。
- ② 会話の登場人物をそれぞれ学生に担当させ、発表させる。発表中に間違った発音は教員が改める。
- ③ 文法の説明はほとんどせず、間違いやすい表現を取り上げ、重点を置いて説明する。
- ④ 意識的に前の課に出た単語や言語表現を使い、学生と置き換え練習をしながら、随時質問を出し、学生に答えさせる。

こうすることで、学生が授業に意識を集中して受講するようになる。

以上のような授業方法を取り入れた結果、授業開始前に行われた口頭試験の成績と授業終了時に行われた同様な試験に比べ、学生の「話せない」「聞き取れない」という弱点の大幅な改善がみられ、研修の目的が達成したと考えられる。

2.2 北京夏期研修への提言

上述のように、夏期研修は予期通りの成果を収めたものの、問題点も現れたと思われる。それは、教材についてである。

現時点で出版されている外国人向けの中国語教科書は、難易度は、ほぼ易しいものから難しいものへとステップアップするように編集されたものである。一方、夏期研修では長期留学向けの教科書を使用しており、その場合には大幅な取捨選択をしなければならない。教員にせよ、学生にせよ、体系的に教える、また体系的に学ぶことができないことは事実である。

使用した教科書は内容上、関連性が薄いため、開講科目にも影響を及ぼした。読解と会話、リスニングの3科目は、長期留学向けの教科書を選定した。それぞれの授業には異なる重点が置かれているが、教科書の

内容には重複する部分が相当ある。そのため、短期間の研修に適した、内容の統一した教科書作りを視野に入れることが今後の課題である。

3 北京語学研修における発音矯正後の発音の変化—実験音声学的分析による変化の実態— (伊藤正晃)

3.1 発音の指導方法

3.1.1 本学における発音指導

中国語中国関係学科の中国語の授業は週4コマあり、曜日によって先生が交代するオムニバス形式を採っており、1学期に1冊のテキストを指導することが決められており、そのため授業1回の進度は予め厳密に組まれている。1回の授業で指導できる範囲に限られているため、発音を指導する際はとくに個人的に時間をかけて指導することが実質的に困難である。そのような状況のもと、学生が習得しやすいように指導をしているが、フィードバックまでには至っていない。学生が積極的に教員の研究室に来て発音矯正を受ける、または教員が学生を呼んで発音の矯正を受けさせるようなことが実施されておらず、学生が1回の講義で発音の全てを正しく習得するには難しい状況である。

現代中国語では、子音と母音の区別ではなく、「声母」と「韻母」に分けられる。声母は子音に相当し、韻母は母音および韻尾(-n, -ng)が含まれる。また、中国語の特徴である「声調」をあわせて3つの要素を8回の授業で指導しなくてはならない。学生の習得の如何にかかわらず、次の項目に進んでいるのが現状である。発音の項目を終えると、すぐさま会話編に突入し、語彙および文法に重点が置かれることになる。

3.1.2 北京夏期研修における発音指導

約半年の語学の授業を終え、基礎の文法を身につけた状態で4週間の北京夏期研修のカリキュラムを受ける。北京で指導を担当する教員は日本語を話せないため、授業はすべて中国語でおこなわれる。内容は基礎からおこなわれ、本学で学習した発音および文法項目を再度学習する。文法の項目に関しては、日本で学習した内容を確認するという姿勢を取りつつ、中国語の説明によって理解するという、新たな方法で文法を理解していく。担当教員は日本語が理解できないため、学生は自らの考えを中国語で伝えなくてはならず、「分からなければ日本語で」という回避ができない状況に置かれている。

このような状況のもと、まず発音の矯正から指導される。北京での教員の指導は学生ひとりひとりを確認し、正しく発音できない学生には時間をかけて何度も発音させて矯正している。学生の中には矯正に多くの

時間がかかり、授業の進行を一時中断する場面もあった。

語彙レベルによる発音の矯正が終わると、会話、読解、文法の項目を学ぶのだが、その際にも発声を要求されるため、自然な会話に近づくよう、さらに文レベルによる発音の矯正がおこなわれる。

3.2 北京夏期研修前後の発音分析

前述のような発音指導を受けたら、どの学生もネイティブに近づくように思われる。しかし、すべての学生の矯正に成功したわけではなかった。

本項では学生に中国語の6つの単母音 (/a/[a], /o/[o], /e/[ɛ], /i/[i], /u/[u], /ü/[y]) を発音させ、それぞれの第一フォルマント (F1) および第二フォルマント (F2) の数値を算出しグラフ化したものを示す。グラフ化する際、ソフトウェア「音声録聞見 for Windows」を使用した。

3.2.1 教員による単母音の音価

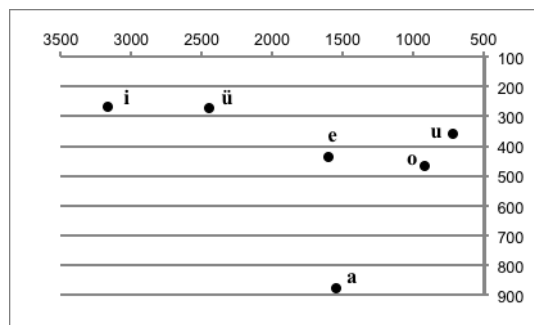


図1

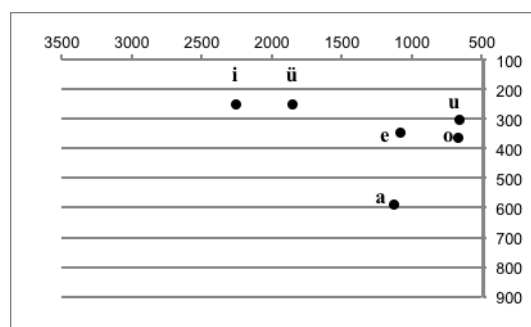


図2

図1は本学科の于講師(女性)のデータである。于講師は北京で生まれ育ったため、標準的な中国語を話すことができると認められる。図2は筆者である。縦軸はF1の周波数(Hz)を示し、横軸はF2の周波数(Hz)を示している。F1は発音時の口の開きに関係しており、周波数が小さいほど口の広がり狭く、大きいほど口が大きく開いていることになる。F2は発音時の舌の最高点の位置に関与しており、周波数が小さいほど

ど舌の最高点が口の奥（喉寄り）にあり、大きいほど口の前（歯寄り）に最高点がある。性別の違いでは、女性は周波数が高いため、男性に比べて範囲が広いが、範囲の広さは口の大きさと無関係である。

本稿における発音矯正で重要な単母音は、日本語にない単母音が正しく発音できるかどうかである。ここでは /ü/、/e/、/u/ の 3 つの単母音を取り上げる。第一に、/ü/ は IPA では [y] と表記され、[i] が非円唇であるのに対し、舌位はそのまま、[i] を円唇にしたものが [y] である。円唇は唇を丸くすぼめるため、舌位が非円唇に比べ奥寄りに移動する。このことから、非円唇 [i] の F1 の数値は変わらず、F2 の数値が小さくなるため、円唇 [y] は平行にスライドした位置に存在する。第二に、/e/ は IPA では [ɛ] と表記され、円唇 [o] と同じ舌位の非円唇音である。/i/ と /ü/ の関係と同様に、/o/ の F1 と同じ数値で、F2 がそれより小さくなったものが e [ɛ] である。第三に、/u/ [u] は日本語の「ウ」とは異なる。日本語の「ウ」は [w] と表記され、円唇 [u] の非円唇音である。発音矯正では、日本語の「ウ」より唇を丸めて突き出すよう指導するが、やはり矯正しにくい発音である。以上の 3 つの単母音について、学生の実態を見ていく。

3.2.2 学生の発音分析

図 3 および図 4 はどちらも同じ男子学生のものである。図 3 は研修前、図 4 は研修後である。図 3 では

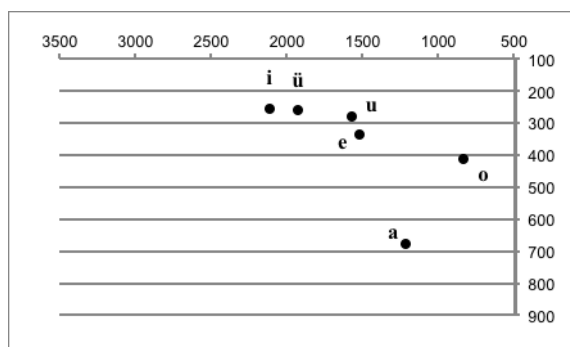


図 3

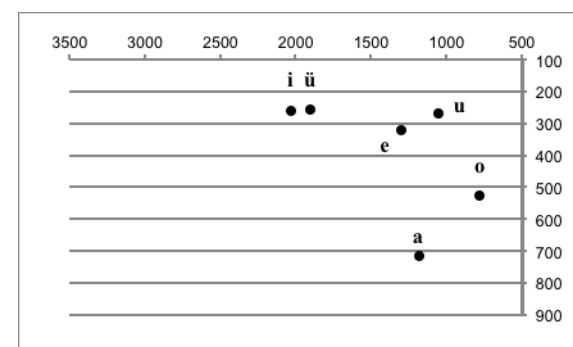


図 4

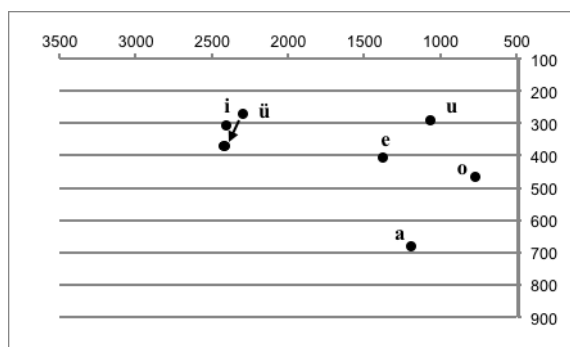


図 5

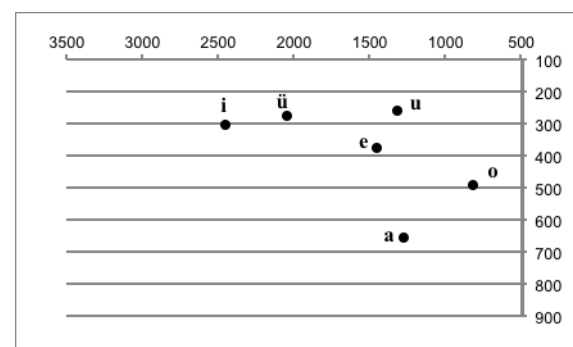


図 6

/u/ が /e/ に近い位置にあり、これは日本語の「ウ」に近い発音をしていることがわかる。図 4 では、/u/ の F2 が小さくなっている。円唇/非円唇の別はこのグラフで見分けることはできないが、舌位が奥寄りになっていることがわかる。この学生は /u/ の発音が矯正されていることがわかる。

図 5 および図 6 は別の男子学生のグラフである。図 5 は研修前、図 6 は研修後である。この学生の場合は /u/ が矯正されている。図 5 では、単音ではなく、日本語の「ユイ」のように 2 つの音を渡っていた。他の学生では「イユ」と渡る事例も見られた。図 6 では /u/ は正しい位置になっており、発音は正しくなったことがわかる。

3.3 まとめ

上述のように、矯正が見られた例がある一方で、発音の範囲が研修前に比べ狭くなる傾向も見られた。日本でおこなわれていた発音指導では、中国語の発音を明確化するため、教員は普段の発音より明瞭に発音し、学生には教員と同じように発音させる。このことから、研修前の発音は全体的にはっきりと発音されている。研修後は、日本にいたときより中国語を話す機会が多くなり、語彙を繰り返し使用することによって、中国語の発音が習慣化された。その結果、研修後の発音は全体的に普段の会話に近い状態で発音されていると考えられる。

はっきり発音することが最終目標ではなく、ネイティブが話す自然発話に近づくことが肝要である。単母音の音価を正確に把握させ、音の違いを聞き分けさせることに発音における第一の目標を置き、その目標を達成できた段階で、音素から音節、語彙、文といったレベルに引き上げて、さらに中国語のもつ「メロディー」を習得できるような指導が必要である。研修で矯正した発音を保持できるようにすること、そして中国語の「メロディー」を体得できるようにすることが、本学科の教員に課せられた責務であろう。中国語を使用する機会が少ない環境から、如何に機会を増やしていくかが今後の課題である。

4 北京夏期研修上級クラスにおける使用教材についての考察－「読解課」使用教材を中心に－（和田知久）

4.1 はじめに

中国語中国関係学科の北京夏期研修は、2011年8月7日から9月3日にかけて28日間にわたり協定校である外交学院（北京市）において実施された。本研修は、対外中国語教育を専門とする現地教員による中国語の授業を受けることで中国語運用能力の向上をはかるとともに、伝統的な演芸を鑑賞したり、現地の企業・工場を訪問したり、北京市にある世界文化遺産や歴史のある街なみを見学したりするといった実地体験を通じて、中国の文化や社会により深く興味を抱き、今後の学習や研究に益をもたらすことを目的としている。

本年度は31名の1年生が、外交学院キャンパス内の国際交流中心に付設の留学生宿舎に滞在し研修プログラムに参加した。北京研修プログラム自体については、すでに『中部大学教育研究』に、2009年に行われた研修についての報告がある（澁谷ほか、2009）ことと、本年度のものとは大枠についてほとんど相違がないため詳細には触れない。

本項では、本年度の研修の際、上級クラス読解課で使用された教材について考察を加えたい。

4.2 上級クラスについて

中国語中国関係学科の北京夏期研修では、プログラム二日目に筆記試験と口頭試験を行い、その結果によって能力別のクラスを編成している。今年度は「初級クラス」2クラスと「上級クラス」1クラスの計3クラスに分かれることになった。

初級クラスについては、クラス間のレベルの上下を設けず、平準化をはかった編成となったが、一方、上級クラスには、中国で生まれて初等ないしは中等教育まで受けた以下の3名の学生で編成されることとなった。

学生Aは、中国で中学2年の途中まで過ごしたあと、家庭の事情で来日した。学生Bは、中国生まれの非漢民族で、少数民族のための学校で中学まで修了している。少数民族のための学校では、基本的には民族語と漢語（いわゆる中国語）の使用比率は半々であるとされている。学生Cは、中国生まれで小学校卒業までを中国で過ごしたあと、家庭の事情で来日した。3名とも「話す」「聞く」といった中国語の日常的な運用能力については問題がないものの、それぞれが生活した地域の方言の影響を受けている。また「読む」「書く」といった能力については、それぞれ程度の差こそあれ、「話す」「聞く」ほどレベルは高くはない。特に学生Bについては、漢字自体についての理解が弱いことを自ら認めている。また、日本語の運用能力についても、中国語同様、「読む」「書く」と「話す」「聞く」の能力にバランスを欠いている。

ちなみに本学での春学期の普段の授業では、学生Aと学生Cで特別クラスを編成して時事文の講読と翻訳や、中国のテレビ番組をもとにして編集されたビデオ教材の聞き取りなどを行っている。学生Bは漢字や文法について一から学びたいという本人の希望もあり、ゼロスタートの学生たちと同じクラスを受講していた。

北京夏期研修における中国語の授業は、月曜日から金曜日の午前中に4コマあり、毎日2科目の授業が行われる。1コマは45分間で、1科目は2コマ連続で行われる。上級クラスの時間割は以下の通りである。

	1・2限	3・4限
月	読 解	会 話
火	読 解	会 話
水	リスニング	読 解
木	読 解	会 話
金	リスニング	会 話

各授業については、「会話」「リスニング」は文字通りの内容であるが、「読解」課は「中国語の総合科目で中国語の骨組みとなる授業である」と今回参加の学生に配布された「研修のしおり」には記されている。

以下に、読解課で使用されたテキストについて検討と分析を加えてみたい。使用された教材には選択された理由があるはずである。教材に対する検討と分析によって浮かび上がってくる本テキストが選択された理由は、すなわち外交学院の現地教員が上級クラスに設定した教育目標と密接に関連するものであり、それについて考察を加えることで、北京夏期研修と日本における平常授業との連携の方途を探るよすがとしたい。

4.3 上級クラス「読解課」で使用されたテキストについて

上級クラスの読解課で使用されたテキストは、馬樹徳主編『現代漢語高級教程 上』（北京語言大学出版社、2002年8月）であった。

本テキストの李揚による「序」によると、本書は北京語言大学の対外漢語本科教育のために作成されたものであるという。北京語言大学は、同大学ウェブページ「学校概況」などによると、1962年に設立された中国で唯一の対外中国語教育と留学生向けの中国語、中華文化教育に取り組んでいる大学であり、創立以来の約50年間に12万人の外国人留学生を輩出している。対外漢語本科教育とは、留学生を対象とした「本科」（＝大学の学部）教育のことで、北京語言大学では、「中国語専攻（漢語言專業）」と「中国言語文化専攻（中国語言文化專業）」に分かれている。ともに、「すぐれた中国語運用能力を持ち、中国語の確かな基礎知識や、一定の専門理論や中国にまつわる基本的な人文知識を備えた、中国の国情や文化的な背景を熟知した実用的なタイプの中国語の人材を養成する」ことを教育の総目標としている。その目標を達成するために、中国語をゼロから始める学生が卒業までの4年間で、3000時間の教育課程を経なければならないとしている。その中心をなすのは、もちろん中国語の授業であるが、北京語言大学では、「中国語言語能力」「中国語言語知識」「中国語人文知識」の各授業に分かれている。さらに、「中国語言語能力」の授業では、ヒアリングやライティング、会話、読解といったような「各技能別科目」と、言語運用の多様性と総合性に鑑み、各技能を総合的にトレーニングする「総合科目」に分けられている。本テキストは、「中国語言語能力」の三年次における総合科目「上級中国語」で使用される教材として想定されている。本テキストのほかに、北京語言大学対外漢語本科教育のカリキュラムに密着した50部以上のテキストが系統的に出版されている。

また、『中高級対外漢語教学等級大綱』（1995）、『初級対外漢語教学等級大綱』（1997）などといった、初級から上級にわたる対外中国語教育における発音、語彙、文法や検定試験についての枠組みや言語運用能力測定のための基準を積極的に採用、導入している点も、本テキストの特徴として挙げることができる。

4.4 本テキストの構成について

本テキストは「上」「下」巻に分かれており、それぞれ10課で構成されている。日本で出版されているテキストが90分の授業数回で1課を学び終えるような分量であるのに対し、本テキストは中国で出版されている他のテキストと同様、1課分の紙幅・分量ともに非

常に多い。

各課は、「課文」、「思考問題」、「新出単語一覧」、「単語の用例と解釈」、「類義語の弁別」、「語句解説」、「文法解説」、「練習問題」の8つの部分に分かれている。

課文は、3000字から8000字程度の文章で、もちろんピンイン（発音の中国式ローマ字表記）は付されていない。主に1980年代から1990年代に発表されたものが中心で、題材、体裁ともに多様多岐にわたっている。書き手も、汪曾祺、梁曉聲、葉聖陶、談歌など、文化大革命収束後のいわゆる「新时期」文学の担い手が多く、創作の自由が比較的認められるようになって以降の作品であるため、かつての教条主義的な社会主義文学の時代の作品と異なり、世界の各地から来て中国で学ぶ留学生たちにとっても、共感しながら読み進められるようなテーマのものが多く見受けられる。

思考問題は、課文を踏まえた5問程度の問いで、内容の理解度を確認するものである。

新出単語一覧では、漢字とピンインのみで、語釈は示されていない。また、各課に60から80語の新出単語に加えて、「车水马龙」「冷眼旁观」といったような慣用的に用いられる四字句が10語前後掲載されているのは、このテキストが上級学習者向けのものであることから適切である。

単語の用例と解釈では、主に新出単語として出てくる語について各課に5語程度、複数の例文を示しながら、注意すべき用法について注釈が加えられている。

類義語の弁別では、各課5組程度の語について、語義に置かれる重点や範囲などの「意味」、貶義語か褒義語かや口語的か文語的かといった「ニュアンス」、品詞や修飾時の結びつきなどの「用法」といった3方面から、例文を示しながらその異同に分析を加えている。

語句解説では、各課に出現する表現のなかで、「諺語」（ことわざ）や「歇後語」（一種のしゃれ言葉）などといった中国語に特徴的に用いられる成語や、中国語の「方言」や「敬語」、「新語」といった事柄について解説が加えられている。

文法解説では、方向補語や可能補語といった補語表現や主に文章語で用いられる助動詞表現についての解説に加え、複文における主節と従属節の意味的な関係について詳細な分析と解説が加えられている点が、初級・中級レベルの文法解説と異なっている。

練習問題は、以上の解釈・解説の定着度を測るために、造語や短文の作文、穴埋めや短文の並べ替えから、課文に関連する2000字程度の文章の読解問題まで出題形式の面で多様であるうえに、各課が30ページほどで構成されている中、練習問題がその3分の1程度を占

めている点で分量の面でも豊富であるといえる。

4.5 本学特別クラスでの授業の進め方

本テキストを使用した特別クラスでの授業の進め方については特筆すべきことはなく、およそ想定されるべきものであった。つまり、冒頭に新出単語を音読し、課文の音読練習のあと、課文の解説を「単語の用例と解釈」、「類義語の弁別」や「語句解説」を見ながら行い、内容理解のための「思考問題」を解くといった流れである。

文法解説は進度によっては触れることのないまま、授業が終わることがあり、練習問題が基本的に宿題として出されるため、受講者は文法解説を自習して練習問題を解くことがある。ただしその場合は、次の授業で教員から文法解説を受けた後、練習問題の解答・解説を受けることになる。

また、教科書の補足として、1000から2000字程度の文章を配布し、朗読練習を課すこともあった。これは、読める単語（漢字）を増やすとともに、程度の差こそあるものの方言の影響が見られる受講者の発音をただす目的から行われたことであった。文章のプリントは事前に配布され、受講者は予習として読めない漢字の発音と分からない単語の意味を調べ、読み込んでおく必要があったため、受講者によってはかなり時間と精力を割く作業となったようだが、受講者同士で読み合わせたり教えあったりしていたようである。

4.6 授業出席者による本テキストに対する感想

日本での授業との進度や内容の相違に戸惑ったりしていないとか、教材の難易度が適切かどうかを知ることに加えて、特に研修プログラムの初期には、現地教員と学生の間を取り持つ目的もあり、報告者は初級クラス、上級クラスともに受講学生に適宜聞き取りを行っている。上級クラスの受講生たちは日常会話には全く不便を感じないレベルの中国語の運用能力を持つため、現地教員とのコミュニケーションには問題がないものの、授業の間の休み時間などを使って、現地教員と受講学生、報告者の三者で、研修での中国語学習について感想を聞いたり意見を交わしたりする機会を持つことができた。その中から得た本テキストについての感想は以下の通りである。

学生A：中学レベルの内容である。中国で中学校に上がっているとき、実際に学んだ文章もあった。日本語に訳す必要がないので自分には簡単に感じた。ただし授業中の進度が速く、分量が多い。

学生B：文章を音読するのが苦手。漢字を書くのも得意ではないが、それ以前に知らない単語も結構多いので、ついて行くのがかなり大変である。

学生C：特に難しくついていけないというわけではない。新出単語や成語には、自分の知らなかったものも結構出てくるが、テキストをしっかりと読めば理解できるレベルである。同義語や類義語の弁別は、日常的な会話の中ではあまり使わないものもあるので難しいと思うこともある。

前述の通り学生Bは日本での授業では特設クラスではなく、ゼロスタートの学生と同じ初級クラスを受講しているため、やはり本テキストを使用する科目だけでなく、上級クラスに参加すること自体を他の2名に比べるとやや困難に感じていたようであった。とはいえ、「読む」「書く」能力と異なり、「話す」「聞く」能力については、他の2名と比べてもそれほど差がないと現地教員（と日本側の教員）も判断したため上級クラスでの受講としたのだが、それは研修中の学生Bの様子から見ても、研修の修了試験の成績から見ても、誤った判断ではなかったと言える。

4.7 まとめ

一般的に中国で出版されているテキストと構成面では類似するところがあるものの、外国人向け中国語教育についての新たな研究成果を踏まえた語彙を収録していることや、文法や類義語だけでなく中国語に特徴的な事項についてまで懇切な解説を加えていることなどからも、本テキストには従来のものにはなかった深化し優れている点をうかがい知ることができる。そのようなテキストを本学科の上級クラス中国語科目の中心的な存在である読解課に採用した結果は、受講する学生たちの感想や成績から見ても非常に適切であったと言える。日本で日本人の教員が行う授業だけではまかないきれない、豊富な関連語彙や、類義語や概念を表す語句の解説などを受けることができたのは積極的に評価すべきである。外交学院教員の教育目標は、本学学生の求めるものに近く、効果的な授業が行われたと判断することができよう。

ただ、問題点がなかったわけではない。「日本語に訳す必要がないので自分には簡単に感じた」という受講者の感想に、報告者は今回の上級クラスの授業には「大きな落とし穴」が存在することを指摘せざるを得ない。確かに、選択された教材と行われた授業のレベルは受講者たちに合致し適切であった。しかし、彼らが中国の中学校で受けた国語の授業みたいだったという感想からも分かるように、日常的な中国語運用の運

用能力に長けた彼ら自身の母語によって行われた授業は日本語という「媒介語」が存在せず、容易に「分かったような気になる」授業でもあった。彼らが日本での普通の授業で難渋していたのは中国語と日本語の結びつきであった。そのために、普通の授業では論説的な中国語の文章を読み、文どうしの論理的な関係に留意しつつ、各文の文法構造を正確に見抜いて、その内容にふさわしい体裁の日本語へと翻訳したりする訓練を繰り返していたのだ。それこそが、将来は日本語と中国語の世界を行き来しつつ仕事を行い、生活をする彼らにとって必要な能力なのである。また、今回は上級クラスの使用教材についての検討であったが、このようなカリキュラムの一本化は、初級・入門クラスにおいてこそその効果が顕著なものになると思われる。それについては今後の検討課題としたい。

5 教科書で学んだ中国語を日常会話へ 語学授業の新発想―「小品」で覚える中国語会話（宗 婷婷）

2009年4月、国際関係学部中国語中国関係学科が設立された。その年の秋学期から私は中国語ⅠA、ⅠBやビジネス中国語など主に一年生が対象となる中国語の授業を担当することになった。

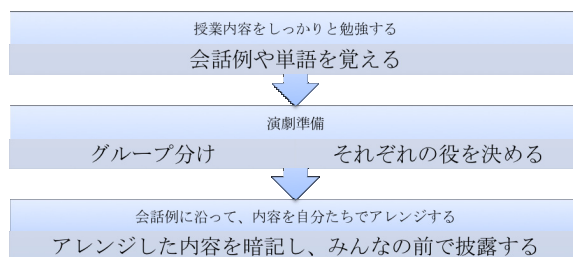
新入生では中国語を初めて学ぶものが殆どで、教科書に沿って基礎のピンインから勉強をしている。週に四日間毎日語学の授業を行い、正直語学の楽しさを感じる学生もいるものの、語学の単調さを感じる学生も少なくはない。教科書ばかりを勉強するのではなく、どのようにすれば楽しく、かつ活用できるような語学の授業ができるのかについて、報告者は常に考えていた。一年生が現在使用している教科書『話す中国語 北京篇1・2』では主に日常会話を中心にしている内容が多く、普通生活のなかでもよく使われる単語や語彙も少なくはない。しかし授業中にできていても、授業後に会話をする時に、教科書で出てきた語彙や表現を交えて話しても、聞き取れない学生が多い。将来通訳などとして社会に出てゆくであろう本学科の学生にとっては、教科書に頼りがちな学習姿勢は大きな問題である。中国語を使う際に教科書の束縛から少しでも離れることができるようにと、昨年以下工夫を試みているのでここで紹介したい。

一つめは、授業中、テキストの会話例をその場で学生たちに暗記してもらい、瞬間的な記憶力を高めるよう勧めている。繰り返しの朗読後に5分～10分の時間を与え、集中力を高めたあと暗記させ、その後一人一人に大きな声で発表させている。こうすれば、学生は教科書に依存することもなく、集中力や語学的な記憶力を高めることもできるはずである。もちろん、暗記

した後でも繰り返しの復習は欠かせない。

二つめは、作文練習時に、教科書で新しく習った文法事項を使用して、既習の語彙や表現を織り交ぜながら、自由に文を作ってもらっている。少人数授業だからこそできる方法であり、クラスの雰囲気を楽しめるものにする効果もある。この作文練習は、流暢に話したりや臨機応変な対応を身につけるのに大きな効果がある。

以上の二つの方法にはそれぞれの効果も見られたものの、ただ暗記しているだけでは口から出てくる言葉も自分のものではなく、クラスの雰囲気も生き生きとしたものにすることはできなかった。そこで次に採用したのが、前述の方法よりレベルの高い、「簡単な小品を演じる」という方法であった。「小品」(xiǎo pǐn)とは中国語で短い演劇という意味で、中国では良く見られる芸術表現の一つである。昨年の秋学期、ビジネス中国語の授業中に一度実施した事があり、その際は学生から良い反響があった。具体的な実施方法は以下のとおりである。



この方法は日本での中国語教育の現場ではそれほど使われていないのではないだろうか。中国での留学生向けの中国語教育ではしばしば使われている方法のようだ。中国では、中国語の学習経験のある外国人タレントが数多く活躍しているが、彼らの中国語は流暢で表現力は豊かである。短い演劇「小品」を通じて言葉を覚えるという方法によって、既習の単語の復習も兼ねつつ、借り物ではない自分の言葉として中国語を話すことができるようになれば、自らの中国語力のレベルアップを実感できるようになるのではなかろうか。特に「ビジネス中国語」などの実用的な中国語運用能力を鍛える授業の中で定期的に用いることが勧められよう。将来、大学祭などの学校行事の際に、学生たちによる中国語劇などができればなお一層よい。中国語が堪能な人材を養成するという共通の目標を持って、引き続き学生たちが楽しく参加できるような授業作りをしたいと思っている。

6 おわりに（和田知久）

「中国語を教える」という行為には、「なにを教えるか」と、「どうやって教えるか」という2つの側面

がある。ただ、「なんのために中国語を教えるか」という「教育目的」が、「なにを教えるべきか」という「教育内容」の決め手となり、さらに「どう教えるべきか」という「教授方法」選択のカギともなる（胡、2009）。本学科における教育では「中国語の高度で実際的なコミュニケーション能力を身につけた上で、政治、経済、文化、ビジネスなど広い視野から中国を理解し、中国・アジアと日本を結ぶ実社会の現場で広く活躍できる人材の養成」をその目標としている以上、本学科における中国語教育もそれに合致するものでなければならないし、それに従った「教育内容」を今後とも吟味検討してゆかねばならない。さて、「どうやって教える」についてはどうであろうか。個々の教員のそれぞれの授業における取り組みの多くはまだまだ「テクニク」の水準であるように思う。今後は、ある「テクニク」を採用した理由、ある「テクニク」を採用した成果についての「アプローチ」的な分析と研究を重ね、「テクニク」の水準にとどまらない、より普遍化され、より一般性のある「メソッド」にまで昇華させられるよう研鑽を続けてゆかねばならないだろう。

最後に、本学における通常授業と北京における夏期研修の連繋の可能性について考えてみたい。今回、報告者にとっては、北京での研修中、現地の教員と比較的密接な連絡と意見の交換をすることで授業の進捗や内容について認識を共有することができた。今後はそれぞれの授業でフォローできる部分と不足する部分については、本学と外交学院との相互連携、相互補完が求められよう。教授内容の選定や配置といった点を双

方で協議検討することにより、共同で教材を開発するなどしてカリキュラムを一本化し、春学期の授業内容を北京夏期研修へシームレスに引き継ぎ、また本学での秋学期の授業につなぐことができれば、より効率的な授業の運営ができるのではないと思われる。また、外交学院の中国語教員が本学に半年から1年単位で赴任し、本学での中国語教育に当たれるような教員派遣の制度を整備することで、1年次の中国語教育だけでなく、学科の中国語教育全体への波及効果を期待することもできよう。平成22年12月に外交学院から中国語教員を招聘し行った交流活動についての報告も第2項でされているように、本学と外交学院との相互連携、相互補完の動きはすでにはじまっている。

謝辞

本報告における取り組みには、平成23年度中部大学特別研究費（CP）「中国語中国関係学科における中国語教育の効果の検証と成果の共有の方途を探る」の一部を使用した。

参考文献

- ・澁谷鎮明、黄強、和田知久「中国語中国関係学科1年次夏期語学研修報告－教育的効果と研修の運営に関する考察」『中部大学教育研究』No.9、2009年12月
- ・馬樹徳主編『現代漢語高級教程 上』北京語言大学出版社、2002年8月
- ・胡玉華『中国語教育とコミュニケーション能力の育成』東方書店、2009年3月

講師	国際関係学部	中国語中国関係学科	和田知久
講師	国際関係学部	中国語中国関係学科	于 小微
講師	国際関係学部	中国語中国関係学科	宗 婷婷
助教	国際関係学部	中国語中国関係学科	伊藤正晃